



企業を取り巻く社会環境が変わり、働く形態も多様化し、会社と個人の関係も、かつての時代のごとく、家族的雰囲気や充実した福利厚生、人情的な関係よりも、仕事中心の関係を求める傾向が強くなっている。

これは、決して否定すべきことではなく、「個の確立」という観点から、むしろ好ましいことかも知れない。

かつての、企業と個人の関係は、ややもすると、家族の関係、人情的関係という美名のもとに、個人の自主性が損なわれたり、個性が否定されたりすることが無きにしもあらずでした。

その反動として、「会社人間になってたまるか」「会社は会社、自分は自分」というように、会社と個人とを、一歩距離を置くことが、自己確立であるという考え方になっているのかもしれない。

経営環境が変化しているので、会社と個人との関係を「離す」「薄くする」ということがあってはならない。

むしろ、もっと、会社と個人が、その使命、目的を共有化しあい、一体になることが大切です。

個人が会社に隷属するのではなく、個人が主役となって、会社という組織において自立、自律することです。

会社という器を大切に自分を活かすことです。自分を活かしてくれる会社という器を大事にすることです。

人々が共鳴し、強い協力関係を作るには、価値観の一致・共有が必要です。

会社の価値観を現したものが経営理念です。これに個人が、どれほど共鳴するかが重要です。

経営理念を基本としてこそ、会社と個人の目的の一致、信念的な一体感が高められ、融合するのです。

経営理念には、会社の存在する意義、使命が明確に定められている。それは、「社会のため」の一言に尽きる。人間は何のために働くのか…「仕事は社会への恩返し」なのです。「恩返し」とは、人々のために働くということです。そして、その働く場所が「会社」なのです。

従って、会社で働くということは、その仕事を通じて社会に恩返しをするという意味です。

換言すれば、会社は、一人ひとりが社会に恩返しをするために集まって仕事をする「公的な場所」なのです。

だから、「会社は会社、自分は自分」ではなく、「会社と自分とは不離一体」であるべきです。

もし、自営業を営んでいるとします。その主人は、決して「仕事は仕事、自分は自分」とは言いません。

それを言えば、その商売が繁盛することはありません。仕事と生活、仕事と自分とは不離一体になっているのです。だから、仕事にも身が入り、繁盛するのです。

個人の生き方として「何をしても自由」というのも一つの考え方です。

しかし、人間は社会的動物であり、好むと好まざるとにかかわらず、他人と関係しない生活はありません。

生きるための基本的要件は仕事であり、仕事なくして生きることは出来ません。

仕事をするということは、社会の人々と、なんらかの関わりを持つことです。

人間は、共同生活を営んでいる。そして、その生活をより豊かにするために仕事に精を出している。

仕事を通じて、お互いの生活を豊かにし、そして、自分も人々の仕事によって豊かさを享受できるのです。

お互いに、「お陰とご恩」をかけあって社会生活を営んでいるのです。

企業は目的集団であり、「社会に貢献する」という使命と目的をもっている。

会社の使命、目的と、個人の生き方とは、本来、高い次元で一致融合するはずで。

したがって、会社と一歩距離を置くのではなく、もっと「会社人間」にならなければなりません。

「会社人間になる」ということは、仕事の主人公になって、仕事を大切にすることであり、自分を大切にすることでもあるのです。

本誌についてのご意見、ご感想をお聞かせください
E-mail : info@tmng.co.jp ・ FAX : 06-6910-5897
ASAP編集部まで



テクノ経営総合研究所 TECコンサルタント

上田 勝 うえだ まさる

松下電器出身、営業本部および本社経営監査部等を経て、松下流通研究所、販売研究所 取締役所長を歴任

NPO兵庫経営塾 副理事長

著書『すべての仕事に商いの心を』（碧天社）「マーケティング理論の基本は商家の家訓の中にある」「部下の心をつかむ正しいリーダーシップのあり方」（『ダイヤモンド・セールスマネジャー』に連載）